

みんなで考える力を育む授業づくり
—考えが広まり、深まる伝え合いを目指して—

1 テーマ設定の理由

昨年度は1年生の担任になり、学校生活のきまりと学習の基礎となる「話す・聞く態度」を身に付ける指導に特に力を入れた。その成果として、1年生の後半では、授業中に積極的に手を挙げて発表する児童や、話し手の方を見たり体を向けたりして、友だちの発表をしっかりと聞こうとする児童の姿が多く見られるようになった。その一方で、発表に苦手意識をもつ児童や発表のときに友達に聞こえる声で話すことができない児童との差が大きくなるという課題が生まれた。

昨年度の実践を通して、自分の意見を発表できない子の多くが、発表時に「はい。～です。なぜか」というと、～だからです。」「〇〇さんにつけ足して（似ていて）、～だと思います。」などの授業で学んだ話型をうまく使えていないと感じた。また、発表時にみんなに聞こえる声で話せないのは、「恥ずかしい」とか「自信がない」という気持ちだけでなく、自分とは異なる考えを認めたり、友達の間違いを優しく受け止めたりするあたたかい学級の雰囲気作りができていないのではないかと考えた。そこで、2年生を担当する今年度は、まず一人一人が発表の基本となる話型を使えるようになること、そして、あたたかい雰囲気 of 学級を作り、間違いを恐れずに自分の意見を発表できる児童を増やすことを目標に実践を行おうと考えた。「教室は間違えるところ」と言われる。間違いをきっかけにその原因や改善点をみんなで考え、共に成長していくクラスを作っていきたい。そのためにも、課題の解決に向けて児童がそれぞれの意見を出し合い、自己の考えを見つめ直し、友だちと一緒に考えを深めていく授業を目指していく。

実践研究の視点

① 自分の考えをもたせる。

頭の中で考えるだけでなく、ノートやワークシートに自分の意見を書き、自分の考えを整理して発表への意欲と自信を高められるようにしたい。その際、話型を意識した文章を書かせるように工夫していく。

② ペア学習やグループ学習によって、自分の意見を友達に伝える場を増やしていく。

発表が苦手な児童に対しては、意見を発表することに慣れさせるようにする。ペアやグループで話をする中で、自分と同じ考えをもつ児童がいたり、意見に賛同してくれる児童がいたりすることで、自分の考えに自信をもたせたい。学習の形態を個から全体に徐々に広げていく工夫を行っていく。

③ いろいろな意見を認め合う学級の雰囲気づくりを行う。

子どもたちは、2年生ということもあり、まだまだ自己中心的な発言や行動が多く見られる。そこで、自分の考えを安心して発表できる雰囲気作りのために、道徳の授業の充実に努めたい。道徳の授業を通して、教室にはいろいろな個性や考え方をもちた友だちがいることに気付かせ、「人と違うのは当たり前」「友だちの考えを聞いてみよう」という気持ちを育てていきたい。それにより、友だちの意見を受け入れ、自分の思いや考えを積極的に発言できる児童を育ていく。

2 実践内容

実践Ⅰ 算数「わくわく算数学習」（6月実施）

本単元は、規則的に並べられた13個の数図ブロックの数を求める学習を通して、問題解決型の学習過程を学ぶ単元である。話し合いを通して、友だちに自分の考えを伝えたり、友だちの考えを理解したりすることで、「見通しをもち筋道を立てて考える力」「表現する力」を育てていく。そのために、「まず」「次に」などの言葉を用いて、話す事柄を順序立てて話して説明することを大事にし、論理的な表現方法を学ばせたい。

(1) 本時のめあて

数図ブロックの数を求めるための図や式を考え、話し合いによって自分の考えを友だちに分かりやすく説明することができる。

(2) 指導の工夫

自分の考えをもたせるために

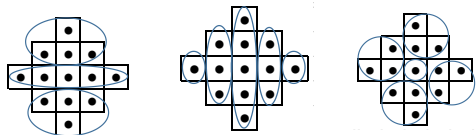
自分の考えをワークシートに図や式で表して視覚的に表現することで、自信をもって友だちに説明できるようにしていく。自分で求め方を考えることができない児童には、まとまりをつくって考えることよいことを個別に助言して支援していく。

伝え合いの場の工夫

児童が互いに自分の考えを説明したり、考えを確かめ合ったりするために、グループでの話し合いを行う。発表が苦手な児童には、友だちの考え方を聞いて、考える筋道を学んだり、友だちの発表の仕方の良さに気付かせたりする。また、説明の際に「はじめに」「次に」という言葉を使って分かりやすく説明することを確認することで、順序を付けて発表することが分かりやすい説明の仕方につながることを理解させる。

(3) 指導案

学習内容 (○) 児童の反応 (・) 研究 (◎)	支援 (◇) と評価 (☆)
○問題を読み、内容をつかむ。 ○本時の学習課題をつかむ。	◇1個ずつ数えるのではなく、図や式にかいて他の方法で考えることを伝える。
<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: fit-content; margin: 0 auto;"> ブロックの数のもとめかたを図や式にかいてかんがえよう。 </div>	
○問題を解くための方法を知る。 ・ブロックのまとまりを線で囲み、図で表す。 ・図を式に書く。 ○ワークシートに自分の考えを書く。	◇図のかき方、式の書き方を説明する。 ◇なかなか図や式がかけない児童には、図を縦に見たり、横に見たりして、ブロックのまとまりを見つけるように助言する。
◎グループで、どのように考えて式に表したのかをそれぞれ話し合う。 ・はじめに、 ブロックを線で囲みました。 次に、	◇教師が「はじめに」「つぎに」という話型を使った説明の仕方をモデルとなつて示し、自分の考えを話型を使って分かりやすく説明するよう



<p>囲んだブロックを数えて、たし算をしました。 式は、$1 + 3 + 5 + 3 + 1$になりました。</p> <p>○全体場でいくつかの方法を発表し合い、気付いたことを発表する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・囲み方は違っても、式は同じになることがある。 ・縦や横に囲むだけではなく、いろいろな囲み方がある。 	<p>に伝える。</p> <p>◇友だちの考えに質問したり、感想を言ったりするように促す。</p> <p>◇話し合いを通して、分かったことや気付いたことを児童に発表させながらまとめる。</p>
<p>同じ答えでも、いろいろな求め方の図や式がある。</p>	
<p>○学習を振り返る。</p>	<p>◇わかったことやもっとやってみたいことをワークシートに書くように伝える。</p>

(4) 実践を振り返って (成果○と課題●)

- ワークシートの自分の考えを書く欄には、あらかじめ「はじめに」「つぎに」という順序を表す言葉を書いておいた。そのため、その言葉に合わせて、分かりやすい説明になっているか読み返したり、文章を書き直したりする子どもの姿がみられた。「はじめに」「つぎに」という出だしが書かれていることで、ふだん自分の考えを書くことが苦手な子どもにも、「考えよう」「書こう」という意欲が高まったように思う。
- グループ内の発表では、順序を表す言葉を使うことを意識しながら、筋道立てて話そうと努力する子どもたちの姿がたくさん見られた。特に、普段の授業ではあまり発表しない児童が、グループの発表では相手に聞こえるように声の大きさに気を付けたり、分かりやすい説明ができるように図を指さしたりしながら、相手に伝わるように分かりやすく説明しようという意欲が感じられた。
- グループのメンバーが、友だちの考え方に興味を持ち、発表の後に質問をするなどして、和気あいあいとした楽しい雰囲気での話し合いができたことが良かった。
- 全体発表では、最初に他の児童と異なったブロックの数を数え方を見つけた児童を指名した。しかし、発表するときの声が小さく、何度か説明の言い直しをしたため時間がかかってしまい、他の児童が発表する時間がほとんどなくなってしまった。普段の様子を考慮して、最初に大きな声で発表できる児童を指名し、良い発表のモデルを示した後に他の児童の指名を行うと良かった。今後も継続して全体発表時の声を大きくする指導が必要だと感じた。
- 全体発表の時間が少なかったために、子どもたちが見つけたいろいろな求め方を紹介することができなかった。時間配分を考えて、計画的に授業を進めなければならなかった。

(5) 今後の実践に向けての課題

今回の実践では、「はじめに」「つぎに」という順序を表す言葉が、相手に分かりやすく説明するために有効であることが子どもたちに伝わったと感じた。そのため、他の授業の時間でも学習したことを活用する場面を設定して、言葉の使い方が定着していくようにしたい。

また、全体発表時の声をもっと大きくなるように、授業の時間だけでなく、朝の会の司会や帰りの会のスピーチなど、ちょっとした機会も利用してこまめに声の大きさを意識させる指導が必要だと感じた。

実践Ⅱ 道徳「おつきさまとコロ」（7月実施）

様々な人とのかかわりの中では、自分の気持ちにそぐわないことや思い通りにならないことが多々ある。本学級の児童は、明るく活発な児童が多く、休み時間には気の合う友だちを誘って元気に遊ぶ様子が見られる。しかし、その一方で、一時の感情から相手を傷つける言葉や態度を発してしまったり、相手の心を傷つけたことに対して素直に謝れなかったりする姿も見られる。そこで、友だちにいじわるをして怒らせてしまった主人公が、心の葛藤の末に友達に謝る決心をしたという資料を用いて、してはいけないことをしてしまった時には、素直にその非を認めて謝ることや、正直で誠実に過ごすことが人間関係を深める上で大切であることに気付かせたいと考えた。

（1）本時のねらい

素直に生活することで心が晴れ晴れすることに気付き、素直に謝ろうとする態度を育てる。

（2）指導の工夫

自分の考えをもたせ、伝えるために

この話の結末では、主人公のコロが友だちのギロに謝る場面は示されていない。そこで、ギロに謝ろうと決心したコロが、次の日にどんなことを話すのかを考えさせる。その際、まずペアになり、どんな風に謝るとよいかを話し合わせる。単に「ごめんね。」というだけでなく、友達との話し合いの中で、より相手の心に伝わる謝り方（言葉や表情）を考えさせていく。

自分を振り返り、これからの友だちとの関わり方を考えるために

終末は、素直に謝ることができたコロに言ってあげたいことを考えさせる。コロがこれからどのように過ごしていくとよいかを手紙に書いてアドバイスすることにより、児童の友だちとの関係づくりに役立てさせていきたい。

（3）指導案

	学習内容（○） 児童の反応（・） 研究（◎）	教師の支援（◇）
導入	○友だちとけんかしてしまった経験について発表する。	◇学校生活や放課後の友達との様子を振り返る。
展開	○資料「おつきさまとコロ」を聞く。 ○コロは、どんなコオロギなのか考えて発表する。	◇場面絵を示し、コロの不誠実な行動や態度を捉えさせる。
	コロの気持ちを考えよう。	
	○ギロに「あやまるんだ。」「あやまらなくてもいいんだ。」という2つの心が闘っている時のコロの気持ちを考える。 ○おつきさまの言葉を聞いて胸を張って歌っているコロは、どんなことを思っているか考える。	◇コロの表情絵を提示し、2つの心の葛藤を分けて板書する。 ◇歌っている時のコロの表情絵を示してコロの表情が変化していくことに気付かせ、その気持ちを想像しやすくする。

	◎ギロに謝ろうと決心したコロが、次の日どんなことを話すのかを考える。	◇ペアで考えを伝え合い、その後全体で考えを出し合わせる。 ◇コロがギロに謝る場面で役割演技を取り入れ、謝った時にどのような気持ちになるのかも考えさせる。
終末	○素直に謝れたコロに言ってあげたいことを考える。 ・ちゃんと謝ることができてよかったね。これからもその気持ちを大切にね。	◇手紙に書いてアドバイスするという形でコロがこれからどのように過ごしていくとよいのかを考えさせる。

(4) 実践を振り返って (成果○と課題●)

○ペアで話し合うことで、「いつも声をかけてくれてありがとう。この前はごめんね。」「これからはひどいことを言わないようにするから仲良くしてね。」など、多様な意見が出てきた。また、その後の役割演技でも、悲しい表情をしたり握手をしたりするなど、より心をこめて謝ろうという気持ちが伝わる方法を考えていた。

●役割演技に時間がかかり、手紙を書く時間が十分にとれなかった。そのため、自分の考えを深めて文章にまとめることができなかつた児童がいた。全体の時間配分を考え、終末で自分のことを振り返る時間を十分にとれるように気をつけていきたい。

(5) 今後の実践に向けての課題

終末に書いたワークシートを見て、児童の考えを深め、単に「ごめんね。」と伝えるだけでなく、自分の言動を振り返って反省し、友達とこれからも仲良くできるような謝り方をすることが、お互いに気持ち良く過ごしていく上で大切であることに気付く児童が多くいたように感じた。この授業で得た気付きや学びを今後の生活で実践していくことができるように、子どもたちの様子をしっかりと見て、学級の雰囲気により良くなるように声かけや支援をしていきたい。

実践Ⅲ 道徳「かにの子と男の子」(11月実施)

学級の児童は、動植物への興味・関心が高く、生活科で育てたアサガオやミニトマトの世話を毎日進んで行ったり、学校の周りで虫を捕まえたりして、生活の中で動植物と関わる機会が多い。しかし、中には世話を疎かにしてしまったり、捕まえた生きものを面白半分に扱って傷つけてしまったりする児童もおり、生き物を大切にしようとする気持ちが感じられないことがあった。そこで、男の子に捕まえられたカニの子の気持ちやかにかにの子を大切に世話する男の子の気持ちを考えさせることで、人間だけでなく、周囲の生きものに対しても優しく接することが大事であることに気付かせたいと考えた。

(1) 本時のめあて

身近な自然に親しみ、動植物の立場にたって、やさしい心で接しようとする心情を育てる。

(2) 指導の工夫

自分の考えをもたせる工夫

まず、場面の様子が伝わるように紙芝居を使って資料を児童に提示した。次に、紙芝居を場面ごとに区切って役割演技を行い、男の子とかにかの子の心情理解を深めていく。お面や水槽などの小道具を

使うことで、登場人物になりきり、それぞれの気持ちに寄り添った自分の考えをもたせるようにした。

自分の考えを深め、伝え合う場の工夫

展開では、男の子とかにの子の立場になって役割演技を行い、それぞれの気持ちを考えさせた。グループの中で演技する子とアドバイスをする子に分かれることで、友だちの考えを聞いて自分の考えを深められるようにした。また、全体での発表が苦手な児童であっても、友だちのアドバイスによって安心して発表できる場を設定する。いろいろな意見を出し合って楽しく役割演技ができるようにしたいと考えた。

(3) 本時の展開

	学習内容 (○) 児童の反応 (・) 研究 (◎)	教師の支援 (◇)
導入	○夏休みに観察した生きものについて話をする。	◇夏休みに生きもの調べをしたことを想起させ、資料への興味関心を高める。
展開	○男の子がかにの子を捕まえた後、家に持って帰ったかどうかを予想して発表する。 <div style="border: 1px solid black; padding: 2px; display: inline-block;">持って帰った</div> ・かわいいから。世話をしたいから。 <div style="border: 1px solid black; padding: 2px; display: inline-block;">持って帰らない</div> ・世話が大変だから。	◇かにの子を捕まえた後の男の子の行動とそれに伴う気持ちを考えさせる。
	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 10px auto; width: 80%;">水そうの中にいるかにの子と世話をする男の子の気持ちを考えよう。</div>	
	○かにの子と男の子のやりとりの劇を見て、話の内容を振り返り、かにの子と男の子の気持ちを考える。	◇かにの子と男の子の役を一人ずつ選び、役割演技のモデルを示すことで、水槽の中にいるかにの子と世話をする男の子の気持ちを想像しやすくする。
	◎もしもかにの子と男の子が話ができたら、どんな会話になるかをグループで話し合い、発表する。 ○紙芝居の最後を見て、感じたことを発表する。 <ul style="list-style-type: none"> ・一生懸命世話をしてもらっても、本当は海に帰りたいんだな。 ・かにを捕まえないほうがよかったのかな。 	◇4人グループで役割演技を行わせる。前半の2人が男の子とかにの子になり、残りの2人にはその様子を見ながらアドバイスをさせる。その後、後半の2人に役割演技をさせる。 ◇かにの子の台詞から、かにの子の本心を知る。 ◇生きものと人間の気持ちには違いが生じる場合があることに気付かせる。

終 末	<p>○授業を振り返り、生きものに優しくするには、これからどうするとよいかをワークシートに書いて発表する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・世話が自分でできないときは、もといた場所に帰してあげる。 ・生きものに餌をあげたり、掃除をしたりして、きちんと世話をする。 	<p>◇考えがまとまらない児童には声をかける。</p> <p>◇生きものに優しくすることは、生きものの立場になって考えると多様であることを話し、余韻を残して終わる。</p>
--------	---	--

(4) 実践を振り返って (成果○と課題●)

○紙芝居やお面を用いたことで、児童が場面の様子や登場の人物の気持ちを想像しやすくなり、導入から展開の役割演技の前までは、子どもたちの考えを多く引き出すことができた。

●役割演技をする場面が広すぎたために、グループで話し合う際に何を話してよいのか分からない児童が多くいた。役割演技をする場面を限定して、積極的に話し合う場面を作ることができるとよかった。

●展開の後半の「どうしてかにの子は海に帰りたいのだろうか」という問いに対して、教師の考えを述べてしまった。子どもの発言をもとに子どもたちに生き物側の気持ちと人間側の気持ちの違いに気付かせることが必要だった。



(5) 今後の実践に向けての課題

導入では、子どもたちの考えを多く取り上げることができた。しかし、役割演技では子どもたちの話し合いが活発にならなかつたり、展開後半で教師自身が話し過ぎてしまつたりして、児童の考えを深めさせることができなかつた。友だちの発表から自分が気付かなかつた価値観に気付き、自分と比べたり、これまでの自分を振り返つたりすることで、他者を認め合うことにつながっていく。これからは、子どもの考えを発表する場面を増やす授業の展開や発問の仕方について、様々な実践研究から学ぶことが必要だと感じた。

3 まとめ

これまでの実践を通して、改めて「児童が自分の考えを持つ」「自分の考えを伝え、広める」「自分の考えを深める」ことが、子どもたちの学びには大切であることが分かつた。子どもが自分の考えを持つことで、児童一人一人が成長する。そして、子どもたち同士の意見が交わり、自分の考えを深めることで集団として成長していくと感じた。そのためには、日頃の授業の質を高めていくこと、授業を支える子どもたちを育てていくことの両方が大切であることが分かつた。実践での反省を生かして、自身の授業力を高めていく努力と子どもたちの様子を見て、一人一人の成長を助けていけるように頑張っていきたい。